



Title	名詞被覆形「コ〔木〕」の様相
Author(s)	蜂矢, 真弓
Citation	語文. 2004, 86, p. 53-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

名詞被覆形「コ」「木」の様相

蜂 矢 真 弓

一

有坂(一九三二)は、上代において、

(a)エ列イ列に終る形はそれが単語の末尾に立つ場合にも用ゐられ得るもの

(b)ア列ウ列オ列に終る形は、そのあとに何か他の要素がついて一語を作る場合にのみ用ゐられるもの

として、(a)を「露出形」、(b)を「被覆形」と名付けた。その上で、筆者は、前稿「名詞被覆形・露出形の型の通時的相違」⁽¹⁾において、複合語の前項部の場合のみについて、有坂が述べている上代の「被覆形」・「露出形」と、平安時代以降の被覆形形態素・露出形態素とを合わせて被覆形・露出形として扱った。そして、有坂(一九三二・一九三四)の「被覆形」―「露出形」の末尾の四つの法則、①ア列―エ列乙類、②ウ列―イ列乙類、③オ列甲類―イ列乙類、④オ列乙類―イ列乙類を受けて、前稿では、

右の有坂の四つの法則を、被覆形態素―露出形態素の末尾については①ア列―エ列、②ウ列―イ列、③オ列―イ列とし、さらに、I型①・①、II型②・②+④・③として、I型・II型の異なり語数と延べ語数の表を作って検討した。すると、I型は、上代(室町・戦国時代)を通して常に被覆形の異なり語数・延べ語数が50%を超える、つまり、常に露出形よりも被覆形の方が勢力が強いのに対し、II型は、上代では被覆形の異なり語数・延べ語数が50%を超えるが、平安中期以降は被覆形の異なり語数・延べ語数が50%を下回る、つまり平安中期以降は勢力が逆転して被覆形よりも露出形の方が勢力が強くなる、ということが分かった。それに対し、本論文ではまず、II型の被覆形と露出形の勢力が逆転する時期についてより詳しく見るために、II型を、②・②と④・③に分けて検討することにする。

右のように分けた表は、次の通りである。⁽³⁾

上代（萬葉集・日本書紀）

④		②		①		
「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	「露出形」	「被覆形」	
0	2	5	13	5	43	異なり 語数
0	3	11	23	6	78	延べ 語数
	100%		72.2%		89.6%	「被覆形」の 異なり語数の%
	100%		67.6%		92.9%	「被覆形」の 延べ語数の%

平安中期（土左日記・蜻蛉日記）

（*は算出不能）

③		②		①		
露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	
2	2	6	0	7	23	異なり 語数
2	6	9	0	11	58	延べ 語数
	50.0%		*%		76.7%	被覆形形態素の 異なり語数の%
	75.0%		*%		84.1%	被覆形形態素の 延べ語数の%

平安後期（源氏物語・栄花物語）

③		②		①		
露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	
4	7	27	1	29	45	異なり 語数
17	38	109	4	117	330	延べ 語数
	63.6%		3.6%		60.8%	被覆形形態素の 異なり語数の%
	69.1%		3.5%		73.8%	被覆形形態素の 延べ語数の%

鎌倉・南北朝（寛一本（高良本） 平家物語・徒然草）

③		②		①		
露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	露出形形態素	被覆形形態素	
4	3	11	3	29	40	異なり 語数
12	3	24	6	51	102	延べ 語数
	42.9%		21.4%		58.0%	被覆形形態素の 異なり語数の%
	20.0%		20.0%		66.7%	被覆形形態素の 延べ語数の%

室町・戦国時代（土井本太平記・天草版平家物語）

③	②	①	
露出形態素	被覆形態素	露出形態素	被覆形態素
10	4	32	2
42	58	178	272
28.6%	5.9%	58.0%	60.4%
10.3%	29.1%	60.4%	60.4%

総計

③	④	②	②	①	①	
露出形	被覆形	露出形	被覆形	露出形	被覆形	
17	13	63	16	83	148	異なり語数
213	71	226	63	363	840	延べ語数
	43.3%		20.3%		64.1%	被覆形の異なり語数の%
	25.0%		21.8%		69.8%	被覆形の延べ語数の%

被覆形と露出形の勢力が逆転するか否かという点で、Ⅰ型とⅡ型は大きく異なるのであるが、この表のようにⅡ型の中を②・③と④・③に分けて比べると、②・③は平安中期以降に完全に勢力が逆転して、被覆形よりも露出形の方が勢力が強くなるが、④・③の被覆形の勢力は、小さくなり始めるのは平安中期、露出形と逆転し始めるのは鎌倉・南北朝時代、完全に逆転するのは室町・戦国時代まで下る。この、④・③の被覆形と露出形の勢力が逆転する時期が、②・③と比べて遅れるということについて考えるためには、勢力が逆転し始めた鎌倉・南北朝時代、及び、勢力が完全に逆転した室町・戦国時代についての③の被覆形態素について考える必要があると思われる。

二

そこで、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における③の被覆形態素の異なり語数と延べ語数を範囲を広げて調べたところ、「コ〔木〕」が六割以上を占めた。左は、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における③の被覆形態素全ての中で、「コ〔木〕」が占める割合を示した表である。

コ	
9	異なり語数
41	延べ語数
64.9%	異なり語数の%
69.5%	延べ語数の%

例をいくつか挙げると次のようである。

コガクレ〔木隠〕

…にんぎやうばかりを、こかくれにのこしをきて、…〔土井本太平記〕巻七〕

コカゲ〔木陰〕

…三百よきを、ふた手にわけ、とうざいの山のこかけより、…〔土井本太平記〕巻三〕

コガラシ〔木枯〕

…萌黄裏つけたる竹笠、こがらしにふきそらせ、…〔曾我物語〕巻一〕

コクソ〔木糞〕

…城ヲ築テコクソヲカウテ地ヲシテ漆ヲ塗フト云ソ〔史記抄〕巻一六〕

コグレ〔木暮〕

暫〔ちまた〕支ヘテ、弓手ノコグレノ中ヘ落ニケリ。〔延慶本平家物語〕第四〕

コサキ〔木先〕

家―鷹―ハ茶ノ細ナコサキソ〔山谷抄〕巻三〕

コダテ〔木楯〕

…たけの一むら、しけりたるをこたてにとつて、さしつめひきつめ、…〔土井本太平記〕巻八〕

コダネ〔木種〕

八十木種―〔略〕此ハイクラモ多イ木種ヲ云ソ〔日本書紀

桃源抄〕中〕

コダマ〔木霊〕

…山ビコ、ダマノ如ニ訃テ通りケレバ、…〔延慶本平家物語〕第四〕

…ソツト語レハコタマカヒ、クホトニソ〔四河入海〕巻二ノ四〕

これらの「コ〔木〕」の例のうち、「コガクレ」・「コカゲ」・「コガラシ」・「コダマ」は『源氏物語』・「コダネ」は『日本書紀』ト部兼方本訓から見られるが、「コクソ」・「コグレ」・「コサキ」・「コダテ」は鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代から見られるものである。つまり、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代における③の被覆形態要素の中で六割以上を占めている「コ〔木〕」は、その時代になっても、造語力が残っているということが分かる。

三

その「コ〔木〕」について、さらに詳しく考える必要があると思われるため、前稿では表に取り入れなかった「キ十ノコ」〔「』という形態などの例について考えることにする。なお、「コノハ」のように間に連体助詞が入っている例は、前稿では、「被覆形十連体助詞十名詞」は一語と思われるが、「露出形十連体助詞十名詞」は形態上一語か三語かの区別がつかないので、今回はどちらも採取しない、という方式を取りカウントしなかった。し

かし、ここでは、被覆形「コ〔木〕」について見るのであり、前稿で述べた通り、「被覆形＋連体助詞＋名詞」は一語と思われるので、「コノハ」のような形を含む例についても調査範囲内とする。なお、これ以降は、鎌倉・南北朝時代及び室町・戦国時代に限らず、その前後を含む広い時代の用例について見ていくことにする。

まず、前稿に使用した文献の中に、「キギノコズエ〔木々の梢〕」の例があった。

キギノコズエ

山風に堪へぬ木々のこずゑも、峯の葛葉も、心あわたゞしう、あらそひ散るまぎれに、…〔源氏物語〕夕霧

三もんしかきたるはたともし、六十よなかれ、きゞのこずゑにひるかへりて、へん／＼たるそのかけに、…〔土井本太平記〕卷十七

そこで、さらに他の文献についても見てみると、まず、以下のような例が見付かった。

キギノコズエ

…簾を少し捲きあげ給へるに、木々の梢も色づき渡りて、さと吹入れたり。〔狭衣物語〕卷一

このごろはきぎのこずゑにもみちしてしかこそはなけあきの山ざと〔後拾遺和歌集〕三四四・藤原兼房朝臣
香隆寺に参るとてみれば木々の梢ももみちにけり〔讃岐典侍日記〕下

風のさと吹たるに、木々の木末ほろ／＼と散りみだれて、御琴にふりかゝりたるやうに散りおほひたる、折さへいみじきに、…〔夜の寝覚〕卷五

さるまゝに涙の雨の紅に、木々の梢もそめぬべし。〔保元物語〕下

…木々ノ梢モサダカナラズ、木葉カツチリケルニ、…〔延慶本平家物語〕第一末

木々ノ梢モ滋ケレバ、友マヨワセル所モアリ。〔延慶本平家物語〕第五本

思かなるかな筑波嶺の。木々の梢にも羽をしき波の浮果をもかけよかし。〔謡曲〕善知鳥

うたてやなこの葛城山の雪の中に。ゆひ集めたる木々の梢を。標と知ろし召されぬは御心なきやうにこそ候へ〔謡曲〕葛城

げにげに見れば山風の。木々の梢に吹き落ちて…〔謡曲〕桜川

不思議な頃は霜降月なれば。木々の梢も冬枯れて。気色寂しき社頭の御垣に。盛りなる紅葉一本見えたり。〔謡曲〕龍田

Qiguno cozuve. (木々の梢) 木々の小枝の先端〔邦訳日葡辞書〕
木々の梢も茂りつゝ、空に鳴きぬる蟬の聲、…〔御伽草子〕浦嶋太郎

つねは岩の間に花を見、秋は木々のこずゑにては月をながめ、万の木の實を愛し、いとやさしき色好みにておはしける。
〔御伽草子〕「のせ猿さうし」

キギノコノハ

わがきつる方もしられずくらぶ山木木のこのはのちるとまがふに〔古今和歌集〕一九五・ただみね

雪ふれば木々のこのはも春ならでをしなべ梅の花ぞ咲きける
〔和泉式部日記〕

その夜の時雨つねよりも木々の木の葉のこりあげもなく聞ゆるに、…〔和泉式部日記〕

露のおきし木木のこのはをふくよりはよにも嵐の身をさそはなむ〔和泉式部統集〕六一六

折シモ空カキ曇リ打時雨レ、木々ノ木葉モ乱レツ、…〔延慶本平家物語〕第六末

キギノコノシタ

こしたもといとどひがたきたび夜のしらつゆはらふきぎのこのした〔新勅撰和歌集〕一三六九・権中納言俊忠

これらの「キギノコノハ」の形態の例は、「キ〔木〕と「コ〔木〕」とで意味が重複している。これらは、複数であることを表すためには重複せざるを得なかったとも思われるが、「キギノコズエ」については「コズエドモ」、「キギノコノハ」については「コノハドモ」によって複数であることを表せることからすると、「キギノコノハ」の形態の例が出現した『古今和歌集』

以降の平安中期の時点から、被覆形態素である「キギノコノハ」の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が薄れ始めたものと考えられる。

次に、以下のような例がある。

コノキノコズエ

岩のそばに桜の木一本あり。高潮満つ折は、この木の梢に宿り、…〔とはすがたり〕巻四

ソノキノコズエ

はるかなる瀧にさしおほひたる杉の木あり。その木の梢に、さけぶ聲しけり。〔宇治拾遺物語〕一六九

其樹ノ梢ニ昨日ノ雨カタマリテアリタヲ知ラヌ也〔中華若木詩抄〕卷之下

モチノキノコズエ

仁治三年大嘗會に外記廳内の竊木の梢に臥せる法師の事仁治三年大嘗會に、人おほくまいりつどひけるに、外記廳のうち、東のかたなるもちの木に、髪おつかみなる法師一人ふしたりけり。〔古今著聞集〕卷十七一六一〇

サクラノキノコズエ

…御涙ヲ流サセ給ケル程ニ、南殿ノ桜木ノ梢ニ懸ラセ給タリケリ。〔延慶本平家物語〕第六本

カシハギノコノシタカゼ

村雨のおどろ／＼しきに、柏木の木下風涼しう吹入りたれ〔ば〕、…〔狭衣物語〕卷三

また、次のような例もある。

タイボクノコズエ

…怪^(あや)ミ見^(み)タチマツルホドニ、彼^(そ)ノ庭^(てい)前^(まへ)ノ大^(たい)木^(ぎ)ノ梢^(しやう)ニゾ現^(げん)
ゼサセ給ケル。『延慶本平家物語』第一本)

これらの「キ十ノ十コ」の形態の例も、「キ〔木〕」と「コ〔木〕」とで意味が重複している。しかし、「コノキ」・「ソノキ」・「モチノキ」・「サクラノキ」・「カシハギ」や「タイボク」で一単語として固定する力の方が強かったため意味が重複したものとわれ、「キ十ノ十コ」の形態の例が多く見られる鎌倉・南北朝時代頃から、被覆形態態素である「キ十ノ十コ」の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が、平安中期に出現した「キギ十ノ十コ」の「コ」よりもさらに薄れてきたものと考えられる。

因みに、次のような例もある。「キ十ノ十コ」の形態の例ではないが、参考までに挙げておく。

コノハノコカゲ

堪雨亦木ノ葉^(は)コカケヲ取^(と)『杜詩統翠抄』巻五)

そして、前稿に使用した文献の中に「キ十ノ十コ」の例があった。「キノコダチ〔木の木立〕」である。

キノコダチ

山のけしき木^(き)のこだち^(いた)に至^(いた)るまで外^(ほか)よりもなを勝^(すぐ)れ^(れ)たり『寛
一本平家物語』巻二)

そこで、さらに他の文献についても見てみると、以下のような

例が見付かった。

キノコダチ

山の姿^(すがた)木^(き)の木立^(こだち)。これこそ我等^(われら)が住^(す)むべき所^(ところ)にて候^(こう)へ(謡
曲『善界』)

キノコズエ

東三條^(とうさんじょう)には、院^(いん)のかたのつはものともあつまりて、よるはむ
ほんをたくみ、ひるは木^(き)のこずゑ山^(さん)の上にのぼりて、：

(『保元物語』上)

木ノ梢^(しやう)ノヌケテタ體^(たい)ソ『蒙求抄』巻一)

標^(ひょう)ハ木ノ梢^(しやう)也『蒙求抄』巻一)

言ハ人ノヒタイト木ノ梢^(しやう)トハチヤトミユルホトニ云ソ『蒙

求抄』巻一)

標奇ハ木ノ梢^(しやう)ノサシ出タル如ク人ニスクレタル處ナリ『蒙

求抄』巻七)

木ノ梢^(しやう)ニコズエトヨムソ『詩学大成抄』巻九)

キノコケラ

肺ハ碎木札也トテ木ノコケラト云心モアリ『史記抄』巻一

四)

竹ノキリクツ、木ノコケラナドトリヲキ『玉塵』巻四)

キノコグチ

木口^(きぐち)。『書言字考節用集』第八冊)

また、間に「ノ」は入っていないが、次のような例もある。

キゴマイ

Qigomai. キゴマイ(木木舞・木相) 垂木の上に取り付ける細長い木の板、『邦訳日葡辞書』

これらは、複数であることを表すためでも一単語として固定する力の方が強かったためでもなく、そのような特別な理由もなしに、「キ〔木〕」と「コ〔木〕」とで意味が重複している。「キ十ノ十コ」の形態の例が多く見られる室町・戦国時代頃から、被覆形態素である「キ十ノ十コ」の「コ」が「キ〔木〕」の意味であるという認識が、鎌倉・南北朝時代頃に多く見られた「キ十ノ十コ」の「コ」よりもさらに薄れてしまい、「キ十ノ十コ」の「コ」に形骸化が起ったものと考えられる。このように、「キギ十ノ十コ」・「キ十ノ十コ」・「キ十ノ十コ」の三つの形態からすると、「キギ十ノ十コ」の形態が出現し始めた平安中期から、「キ十ノ十コ」の形態が多く見られる鎌倉・南北朝時代を経て、「キ十ノ十コ」の形態が多く見られる室町・戦国時代にかけて、右の三つの形態をとる「コ」の「コ〔木〕」の意味が「キ〔木〕」であるという認識が薄れていき、「キ十ノ十コ」の「コ」に形骸化が起ったということが考えられる。

さて、「キギ十ノ十コ」・「キ十ノ十コ」・「キ十ノ十コ」のように、「名詞露出形十ノ十同一の名詞の被覆形」の形態をとることから、名詞の被覆形の意味が名詞の露出形の意味と同一であるという認識が薄れていることが分かる例として、他に「サケノサカナ」「メノマヘ」がある。

サケノサカナ

酒のさかなにあさのほとりのちしやは sakeのさかなに五
条へまいれはちさのは(『田植草紙』酒來時之哥)

メノマヘ

こむよにもはやなりなんめのまへにつれなき人をむかしと
おもはん(『古今和歌集』五二〇)

しかしこれらは、それぞれ「サケノサカナ」「メノマヘ」の例のみで、他に「サケ十ノ十サカ」・「メ十ノ十マ」の例がある訳ではない。つまり、「サカ〔酒〕」・「マ〔目〕」そのものの意味が薄れてきてしまったということではないということである。ところが「コ」の場合は、「コ〔木〕」そのものの意味が薄れてしまっていると言える。

右の三つの形態をとる「コ」の異なり語数は、「コズエ」・「コダチ」・「コケラ」・「コグチ」・「コマイ」・「コノハ」・「コノシタ」・「コノシタカゼ」の八例もある。これは、右の三つの形態をとる「コ」に限って「コ〔木〕」の意味が薄れていったのではなく、「コ〔木〕」そのものの意味が薄れていき形骸化が起ったことを示していると考えられる。

よって、「キギ十ノ十コ」の形態の例が出現し始めた平安中期から、「キ十ノ十コ」の形態の例が多く見られる鎌倉・南北朝時代を経て、「キ十ノ十コ」の形態の例が多く見られる室町・戦国時代にかけて、「コ〔木〕」そのものの意味がますます薄れていってしまったと考えられる。

四

①・②・③いずれにおいても、時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱くなっていき露出形の勢力が強くなっていく。よって、「コ〔木〕」も、時代が下るにつれて被覆形の勢力が弱くなっていき露出形の勢力が強くなっていく。故に、「コ□□」が存在することが難しくなってきたら、その「コ□□」が衰退するか、「キズエ」に変化するかのどちらかの道を歩むはずである。例えば「コズエ」の場合で考えると、「コズエ」が衰退するか「キズエ」に変化するかのどちらかの道を歩むことになる。ところが、「コズエ」は衰退する道も「キズエ」への変化の道も歩まない。露出形の勢力が強くなっていくことによって、「コズエ」の「コ」の意味が薄れていき、「コズエ」という語の存在がますます難しくなっていくにもかかわらず、「コズエ」はどちらの道も歩まない。それは、露出形の勢力が強くなっていくことによって「コ〔木〕」の意味が薄れていく一方で、第二節に述べたように「コ〔木〕」に造語力が残っていることに起因していると思われる。

そのことは、以下のようにであったと考えられる。意味が薄れていくということに対して、造語力が残っているという矛盾した現象が何故起こるのかという点に問題は残るが、「コ〔木〕」は、意味が薄れていく一方で造語力が残っているという特殊な性質を持っている。つまり、露出形の勢力が強くなっていくことによって「コ〔木〕」の意味が薄れていく一方で、「コ〔木〕」に造語力

が残っているため、「コ□□」の形態は力を持っているということである。そのため、「コズエ」は、衰退する道でも「キズエ」への変化の道でもなく、「コズエ」という形態は保ったまま、その上に「キ」を付ける形態を取る道を歩んだ。「コ〔木〕」の意味が薄れ始めた平安中期の時点では「キギノコズエ」になり、もっと意味が薄れると「□□キノコズエ」になり、それがさらに意味が薄れた結果「キノコズエ」になるという道である。この「キノコズエ」の「コ」が形骸化という状態である。

このような「キノノコ□□」の「コ」の形骸化を引き起こすに至った、意味が薄れていく一方で造語力が残っているという、矛盾した特殊な性質を持っているが故に、「コ〔木〕」の被覆形の勢力は、小さくなり始めるのは平安中期、露出形の勢力と逆転し始めるのは鎌倉・南北朝時代、完全に逆転するのは室町・戦国時代となり、平安中期に完全に逆転した②・②と比べると時期は下る。そしてその結果、もともと種類が少ない上に「コ〔木〕」が六割以上を占める④・③の被覆形は、露出形と勢力が逆転する時期が②・②に比べて遅くなるものと考えられる。

注

- (1) 『国語語彙史の研究』二十五(二〇〇六 和泉書院)
- (2) 前稿において、「クロ〔黒〕」「クリ〔渾〕」を調査対象外としたことによって、明らかに有坂(一九三一・一九三四)の③に該当するものはないことになった。甲乙不明のため③・④のどちらであるかが分からないものについては、④に含めてある。

(3) 使用文献は、前稿同様以下の通り。

『萬葉集総索引』（平凡社）、『萬葉集』（新編日本古典文学大集 小学館）、大野晋『上代仮名遣の研究』（岩波書店）、『土左日記総索引』（日本大学人文科学研究所、『かげろふ日記総索引』（風間書房、『源氏物語大成』（中央公論社）、『栄花物語 本文と索引』（武蔵野書院、『平家物語総索引』（学習研究社）、『平家物語』上・下（日本古典文学大系 岩波書店）、『徒然草総索引』（至文堂）、『土井本太平記 本文及び語彙索引』（勉誠出版）、『天草版平家物語総索引』（勉誠社）、『天草版平家物語』（勉誠社文庫）

(4) 使用文献は以下の通り（注（3）に挙げたものの以外の文献を挙げる）。

『保元物語総索引』（武蔵野書院）、『半井本平治物語本文および語彙索引』（武蔵野書院）、『保元物語 平治物語』（日本古典文学大系 岩波書店）、『宇治拾遺物語総索引』（清文堂）、『宇治拾遺物語』（日本古典文学大系 岩波書店）、『無名草子総索引』（笠間索引叢刊47）『校注 無名草子』（笠間書院）、『曾我物語総索引』（至文堂）、『曾我物語』（日本古典文学大系 岩波書店）、『とはずがたり総索引』『自立語篇』（笠間索引叢刊99）、『たまきはる』（新日本古典文学大系 岩波書店）、『延慶本平家物語』本文篇・索引篇（勉誠社）、『抄物資料集成』（清文堂）、『続抄物資料集成』（清文堂）

(5) 『日本書紀』からの引用部分である。
：夫須^{フス}、^ハ十木^{トキ}種^{タネ}、：（卜部兼方本日本書紀）神代・上

(6) 「梢」等、確例でないものもあるが、他の読み方は考えられないことから、判断材料となる用例を広く挙げるために、第三節に限っては、確例でないものも含めることとする。

(7) 「コズエドモ」の用例には以下のようなものがある。

げに、まだほのかなるこずゑどもの、：（『源氏物語』藤裏葉）
：いつしかと夕月夜さし出でて、梢^{コズエ}どもいとおもしろく見渡されたり。（『狭衣物語』巻四）
：いま開けそむる花の木末^{コノハドモ}ども、似る物なきほどなるに、：（『夜の寝覚』巻四）
『源氏物語』・『狭衣物語』・『夜の寝覚』には、「キギノコズエ」と「コズエドモ」の両方の例がある。

(8) 「コノハドモ」の用例には以下のものがある。
：こ暗う繁れりし木の葉ども残らず散り乱れて、：（『更級日記』）

【参考文献】

有坂秀世（一九三二）「国語にあらはれる一種の母音交替について」（一九三四）「母音交替の法則について」
（『国語音韻史の研究 増補新版』一九五七 三省堂）
川端善明（一九七九）『活用の研究』Ⅱ（一九九七 清文堂出版）

【使用文献】（注（3）・（4）に挙げたものの以外の文献を挙げる。）

『新編国歌大観』（角川書店）、『狭衣物語語彙索引』（笠間索引叢刊50）、『狭衣物語』（日本古典文学大系 岩波書店）、『讃岐典侍日記 本文と索引』（おうふう）、『夜の寝覚総索引』（明治書院）、『夜の寝覚』（日本古典文学大系 岩波書店）、『御伽草子総索引』（笠間索引叢刊91）、『御伽草子』（日本古典文学大系 岩波書店）、『謡曲二百五十番集索引』（赤尾照文堂）、『謡曲大観』（明治書院）、『邦訳日葡辞書』（岩波書店）、『和泉式部日記総索引』（武蔵野書院）、『更級日記総索引』（武蔵野書院）、『土左日記』『更級日記』（日本古典文学大系）

系 岩波書店、『古今著聞集総索引』（笠間索引叢刊12）、『古今著聞集』（日本古典文学大系 岩波書店）、柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究』影印篇・研究篇（清文堂）、『中華若木詩抄 卷之下 文節索引』（笠間索引叢刊83）、『中華若木詩抄』（勉誠社文庫）、『抄物大系別巻 玉塵抄』（勉誠社）、中田祝夫・小林祥次郎編『書言字考節用集研究並びに索引』（勉誠社）、『國寶_{目録}部_方日本書紀神代巻本文篇』（法蔵館）

— 本学大学院博士後期課程 —